

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の3年目)

1. 研究課題

中国在家の仏教観：唐道宣撰『広弘明集』を読む

Chinese Laity's View of Buddhism: Reading the Expanded Collection of the Propagation of Light compiled by Daoxuan in the Tang

2. 研究代表者氏名

船山徹

FUNAYAMA Toru

3. 研究期間

2020年4月-2024年3月(3年目)

4. 研究目的

本研究班は、共同研究班「中国在家の教理と経典」の方法と成果に基づき、唐の道宣撰『広弘明集』に収める中国在家の著作から彼らの仏教観を検討する。四～七世紀頃の中国で仏教は様々な発展を遂げた。出家僧だけでなく文人等の在家信者が果たした役割も大きかった。出家者が学んだ経典や論書は現在の大蔵経の全貌を理解することから知られるが、一方、在家者の仏教知識がどの程度のものだったか、それは出家社の理解と相違する点があったのか、在家者に共通の得手不得手があったか等の問いに答えることは予想以上に難しく、現在に至るまで確かな答えは得られていない。人文研ではかつて六朝隋唐時代の知識人や庶民の仏教を知るため、『肇論』『弘明集』等の会読が行われた。本研究班はその流れを継承しながら、多くの在家仏教徒の著作を収める道宣撰『広弘明集』(7世紀)を主な素材として中国在家仏教の実態解明を目指す。

Based on the methodology and results conducted by "Buddhist Sutras and Doctrines for the Chinese Laity" (2016-20), this projects attempt to shed a new light on the acutal situation of Buddhist Laity in medieval China. As Chinese Buddhism underwent various developments between the fourth and seventh centuries, not only monastics but also laypeople played a large role. Although we can learn about the sutras and treatises studied by monastics through the entire Buddhist canon that is extant today, with regard to lay Buddhists, various questions remain unexpectedly difficult to answer, such as: To what extent did laypeople possess knowledge of Buddhism? On what points was that knowledge similar to and different from the knowledge held by monastics? Were there any shared likes and dislikes of particular

Buddhist scriptures and ideas among laypeople? Previous seminars held in this institute studied texts such as the Zhao lun and Hongming ji in order to understand the Buddhism of intellectuals and ordinary people during the Six Dynasties, Sui, and Tang periods. The present research seminar aims to continue this line of inquiry, taking as its main source text the Expanded Collection of the Propagation of Light (Guang hongming ji, 7th c.) – in which the compiler Daoxuan gathered the writings of many lay Buddhists – in order to clarify the real conditions of lay Buddhism in China.

5. 本年度の研究実施状況

共同研究班名の通り中国中世の在家仏教徒に焦点を当て、在家者が抱いている仏教とは何か、仏教のいかなる部分を必要としていたかを探る文献会読を16回行った。具体的には唐の道宣撰『広弘明集』巻十九と巻二十に収める六朝時代の南朝貴族が書いた仏教文献を対象として取り上げ、その原文校訂と現代語訳と原文用語についての語注を作成した。最終的結論を示すことは時期尚早であるので言明を控えるが、現時点でわかった事柄及び恐らく結論として言えそうな感触を抱く事柄は既に幾つか蓄積することができている。例えば第一に、在家者は出家者教団の生活規則を集成する『律』（ヴィナヤ）の閲覧を許されていなかったという一般的前提に沿う結論として、在家者の著した文中から『律』を典拠とすると確実に断定できるものを探し出すことが現時点ではできていない。第二に、仏教書を構成する経典・律・論書のうち、在家者が律を用いないことは上述の通りであるが、論書への言及についても論書の種類が限定される。つまり、在家者は全ての論書を読んでいたわけではない。第三に、経典についても在家者が頻繁に引用する経典名と内容には一定の傾向があり、さらに経典の注釈書にまで踏み込んでいる事例を確定的に示すことは難しい。

6. 本年度の研究実施内容

- 2022-04-15 『広弘明集』会読 陸雲「御講波若經序」（3）訳注 発表者 倉本尚徳
- 2022-05-06 『広弘明集』会読 陸雲「御講波若經序」（4）発表者 趙ウニル 京都国立博物館学芸部
- 2022-05-20 『広弘明集』会読 蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」（1）発表者 中村慎之介 文学研究科 PD
- 2022-06-03 『広弘明集』会読 蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」（2）発表者 久永昂央 東大寺ミュージアム
- 2022-06-17 『広弘明集』会読 蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」（3）発表者 古勝隆一
- 2022-07-01 『広弘明集』会読 蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」（4）発表者 魏藝 龍谷大学大学院文学研究科博士課程
- 2022-07-15 『広弘明集』会読 蕭子顯「御講金字摩訶般若波羅蜜經序」（5）発表者 古

勝隆一

- 2022-09-16 『広弘明集』会読 「發般若經題」(1) 発表者 船山徹
- 2022-10-07 『広弘明集』会読 「發般若經題」(2) 発表者 中西竜也
- 2022-10-21 『広弘明集』会読 「發般若經題」(3) 発表者 趙ウニル 梨花女子大学校
- 2022-11-18 『広弘明集』会読 「發般若經題」(4) 発表者 倉本尚徳
- 2022-12-02 『広弘明集』会読 「發般若經題」(5) 発表者 古勝隆一
- 2022-12-16 『広弘明集』会読 「發般若經題」(6) + 「主上垂爲開講日參承」 発表者 久永昂央 東大寺ミュージアム
- 2023-01-20 『広弘明集』会読 「廣弘明集卷第二十」+ 蕭綱「上大法頌表」+ 「大法頌」 発表者 河上麻由子 大阪大学大学院人文学研究科
- 2023-02-17 『広弘明集』会読 蕭綱「大法頌〈并序〉」(1) 発表者 魏 藝 龍谷大学大学院文学研究科博士課程
- 2023-03-03 『広弘明集』会読 蕭綱「大法頌〈并序〉」(2) 発表者 中西俊英 京都女子大学文学部

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

船山徹、稲葉穰、稲本泰生、ウィッテルン、クリスティアン、古勝隆一、倉本尚徳、中西竜也、石垣章子、ラブダール、ネイト

学内

中村慎之介(文学研究科 PD)

学外

河上麻由子(大阪大学大学院人文学研究科)、魏藝(龍谷大学大学院文学研究科)、中西俊英(京都女子大学文学部)、村田みお(近畿大学国際学部)、久永昂央(東大寺ミュージアム)、趙ウニル(梨花女子大学校)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)		9 (1)									
京大内 (人文研を除く) (内女性)		1 (0)			1						
国立大学 (内女性)		1 (1)									
公立大学 (内女性)		0 (0)									
私立大学 (内女性)		1 (1)									
大学共同利用機関法人 (内女性)											
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)		1 (1)									
民間機関 (内女性)		1 (0)									
外国機関 (内女性)		1 (1)									
その他 ※ (内女性)											
計	0	15 (5)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	3		1	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)		
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)		
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名（必須）	掲載 論文数 （必須）	掲載 年月日 （必須）	論文名（必須）	発表者名 （必須）
1	Chinese Buddhism and the Scholarship of Erik Zürcher. Sinica Leidensia. Leiden/Boston: Brill	1	R5.1	Jizang's 吉蔵 Sanskrit	Funayama Toru
2	東方學	1	R5.1	失訳仏典『薩婆多毘尼毘婆沙』九巻の漢訳年と漢訳地	船山徹
3	説話文學研究	1	R4	『今昔物語集』巻四「龍樹・提婆二菩薩伝法語」における日本化の諸相	船山徹

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書
なし

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

14. 次年度の研究実施計画

昨年までと同じ方式で今年も年 15-16 回の研究班を開催する。例年通り毎回の会読資料を充実させるのは勿論であるが、更に最終年度として「在家の仏教観」という主題に対する答えを探り、文章化する。ここ二十年ほどの間に大きな展開を示した中国木版大蔵經の公開状況を最大限活かす方法を具体的に示し、今後の研究方向のあるべき姿を具体的に示すよう、報告書の作成に尽力する。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

古典中国語仏教文献の原典研究という地味な（しかし最も基礎的であり最も重要な）研究成果を公開する場として『東方學報』京都の恩恵を最大限活用する。